【視点３】学習環境の整備

(1) 具体策

ア　児童理解

イ　算数コーナーの掲示

ウ　基礎・基本の定着

(2) 実践内容

ア　児童理解

(ｱ)　実態把握

◇　日々の学習などから個々の実態を把握し，各児童に応じた個別指導や声かけによる学びの支援を行う。

◇　継続的なアンケート調査により，児童の変容を分析し，課題を明確にする。

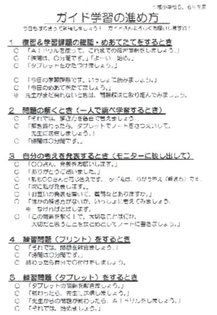
◇　毎時間の習熟問題を通して，実態把握を行い，支援が必要な児童を把握しておく。

(ｲ)　個に応じた指導

◇　個人差のある学年には，時間配分等を考慮し，可能な範囲で児童の思考，表現がスムーズに行えるように支援する。

◇　自力解決が早くできた児童は，友達のサポートに入れるようにし，学び合いの活動が行えるよう，臨機応変に対応する。

◇　ガイド学習の定着が不十分な児童には，ガイド学習の進め方（右図参照）を参考にさせる。



ガイド学習の進め方

イ　算数コーナーの掲示

◇　「つかむ」過程で前時の学習をまとめた算数コーナーの掲示物を確認し，既習事項を確認し，前時との違いを考え，本時のめあてをつかませる。

◇　「調べる」「深める」過程で，必要に応じてヒントとして算数コーナーを確認させる。

◇　算数コーナーに毎時間のまとめを掲示し，算数の日常化を図る。

ウ　基礎・基本の定着

(ｱ)　チャレンジタイムの充実

◇　毎週火曜日の朝活動の 10 分間をチャレンジタイムとして設定し，年間を通して算数のドリル学習に取り組む。

◇　自己採点をした後，解答を見て間違い直しをしたり，友達に教えてもらったりして，できないままで終わらないようにする。

(ｲ)　ＡＩドリルの活用

◇　「生かす」過程での活用だけでなく，時間があるときにタブレットを開き，ＡＩドリルを自分のペースで進める。

3　成果と課題

(1) 成果

○　一単位時間の指導過程を工夫することにより，児童が見通しをもって，主体的に学習に取り組むようになった。

○　主体的な学びの支援や終末の時間を確保することにより，児童の理解が深まった。

○　話合いを充実させることにより，自分の考えを進んで発表できるようになった。

○　ＩＣＴの活用や教師の関わり方の工夫をすることにより，主体的に思考・判断できるようになった。

○　児童の実態把握や個に応じた指導をすることにより，児童の思考，表現がスムーズにできるようになった。

○　チャレンジタイムの充実やＡＩドリルの活用により，基礎基本の定着を図ることができた。

(2) 課題

●　終末 10 分間の確保ができないことがあるので，一単位時間の指導過程の工夫がさらに必要である。

●　評価を明確にするために，自己評価の時間の設定や評価簿活用の研究をしていきたい。

●　話合いの充実を図るために，発達の段階に応じたガイド学習の研究や継続的な個別指導が必要である。

●　表現力の育成のために，他教科でもこの実践を取り入れていきたい。

●　算数科の系統的な理解や算数の日常化を図るために，効果的な算数コーナーの掲示を工夫していきたい。

●　習熟に応じた家庭学習を図るために，タブレットの持ち帰りや家庭との連携を深めていきたい

【研究同人】

校　長	有馬　博志	教　諭	羽嶋　良太
教　頭	浜田　勝正	養護教諭	竹中　悦子
教　諭	三原　敏幸	事務職員	繁昌　修一
講　師	佐々木　千尋	司書補	宮本　有見子
講　師	橋本　優菜	学校主事	高野　裕美子

【旧同人】

校　長	比志島　寿	講　師	須賀　麻美

令和2・3年度

垂水市指定「算数科」研究協力校

主体的に思考，判断し，進んで表現する子どもの育成

～算数科における極少人数指導を通して～

令和３年10月８日(金)

垂水市立牛根小学校

1　研究主題設定について

学校教育目標
ふるさとを愛し，進んで学び，心豊かで，たくましく生きる子どもの育成

めざす子ども像

【やさしい子ども】
明るく礼儀正しく，思いやりがあり，気付き考え行動できる子ども

【かしこい子ども】
よく聞き，自ら考え，判断したことを進んで表現し，学習に励む子ども

【がんばる子ども】
進んで体を鍛え，ねばり強くやり抜く子ども

【本校の子どもの実態】
○ 明るく，素直でやさしい
○ 仲間意識が強く，互いに助け合い，協力し合う
○ 係や仕事に一生懸命取り組む

進んで表現できる子どもを育てたい！

【本校の課題】
● 少人数のため，競争意識が薄い
● 自己肯定感が低い児童がいる

研究主題
主体的に思考，判断し，進んで表現する子どもの育成
～算数科における極少人数指導を通して～

【仮説1】
授業において，主体的な学びを実現する授業を工夫すれば，児童は自ら思考，判断し，表現しようとするのではないか。

【仮説2】
表現する場の設定，充実を図れば，児童は主体的に思考，判断し，表現しようとするのではないか。

【仮説3】
学習の環境を整備すれば，児童の思考，表現の助けとなり，児童は主体的に思考，判断し，表現しようとするのではないか。

視点

【視点１】授業の工夫・改善
【視点２】表現の場の工夫・充実
【視点３】学習環境の整備

2　研究の実際

【視点１】授業の工夫・改善

(1) 具体策
　ア　一単位時間の指導過程の工夫（複式指導）
　イ　主体的な学びを支援する工夫
　ウ　終末 10 分間の確保（まとめ，習熟，振り返り）

(2) 実践内容
　ア　一単位時間の指導過程の工夫（複式指導）

「つかむ」：学年の実態に応じた直接指導と間接指導を工夫する。
※学年一人の指導は，深い学びとなるように教師の関わり方を工夫する。
「見通す」：前時との違いやこれからの学習の進め方をつかませる。
「調べる」：間接指導に入る前の学習活動の指示や時間の設定をする。
「深める」：互いの考えを発表し合い，解決の根拠を深める。
「まとめる」：めあてとまとめの整合性を図る。
「生かす」：本時の目標が達成されているかみとれる評価を工夫する。
（発表，ノート，適用問題）

イ　主体的な学びを支援する工夫

(ｱ)　ＩＣＴの活用

◇　「調べる」「深める」過程で書画カメラを活用し，自らの考えを明確に伝えられるようにする。

◇　「まとめる」過程でデジタル教科書を使い，参考となる解き方を確認したり，適用問題を電子黒板で映し出したりする。またタブレットからＱＲコードを読み取り，デジタル教材で確かめさせる。

◇　「生かす」過程でタブレットを活用して練習問題に取り組ませる。

(ｲ)　ガイド学習

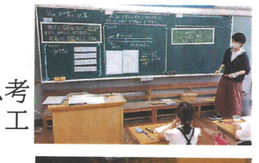
◇　「つかむ」「調べる」「深める」過程での間接指導でガイド学習をさせ，主体的な学びができるようにする。

(ｳ)　具体物や視覚的資料の活用

◇　ブロックやテープ図を用いた操作活動やブロック図による計算過程の視覚化により，計算方法の意味が理解できるようにする。

ウ　終末 10 分間の確保
（まとめ，習熟，振り返り）

(ｱ)　板書の構造化



◇　めあてとまとめの確認や思考の流れが分かるように板書を工夫する。

(ｲ)　ドリル学習

◇　既習事項の定着はもちろんのこと，個に応じた課題解決の習熟プリントやＡＩドリルに取り組ませる。

【視点２】表現の場の工夫・充実

(1) 具体策
　ア　話合いの充実
　イ　ＩＣＴの活用
　ウ　教師の関わり方の工夫

(2) 実践内容
　ア　話合いの充実
　(ｱ)　目指す子ども像の明確化

【低学年】理由をはっきりさせながら，自分の考えを順序立てて簡単に伝えたり，みんなの前で具体物や図等を操作したりできる子ども
【中学年】理由をはっきりさせながら，自分の考えを筋道立てて伝えたり，自分の考えを伝えるために必要な図，言葉，数，式，表，グラフを選んだりすることができる子ども
【高学年】自分の考えを伝えるために必要な図，言葉，数，式，表，グラフを準備し，それを用いて説明したりできる子ども

(ｲ)　ガイド学習の定着

◇　「ガイド学習の進め方」に沿って，各学習過程における話合いの仕方を身に付けさせる。
◇　互いの解決方法や考えについて，異なる方法や意見があれば，率先して発表させる。

イ　ＩＣＴの活用

(ｱ)　電子黒板の活用

◇　「調べる」過程で，ノートに書いた自分の考えを書画カメラやタブレットを使って，電子黒板に映し出し，発表しやすくする。

◇　「深める」過程でお互いの考えを同時に映し出すことにより，共通点や違いを明確にし，活発な対話が行えるようにする。

(ｲ)　タブレットの活用

◇　「調べる」過程でロイロノートを使って，意見を集約したり，質問し合ったりして，自分の考えを深められるようにする。

(ｳ)　教師の関わり方の工夫

◇　「深める」過程で一人の学年では，教師が児童役になって発表を聞いたり，違う考えを発表したりして対話による思考ができるようにする。

◇　「深める」過程で発表に根拠がないときは，「なぜ，そうなるの？」「その理由は？」等と発達段階に応じた根拠を求め，論理的な思考をさせるようにする。

◇　「まとめる」過程で話合いが停滞しているときは，めあてを確認させたり，板書を振り返らせたりする。